

県中教研 技家(家庭)部会だより

第 41 号

発行日 令和8年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 吉田みづき
題 字 金山 泰仁 先生

わくわくする授業

指導主事 谷口 久代

「次、家庭科だ！わくわくするなあ〜」ある学校で、授業が始まる直前に、生徒がつぶやきました。チャイムが鳴ると、どの生徒も自ら設定した課題の解決に向けて、試行錯誤しながら、主体的に活動に取り組んでいます。一人でじっくりと考える姿。「どうして?」「なるほど!」「ここはもっとこうしよう!」と、友達との対話を通して、思考を広げたり深めたりする姿。実践的・体験的な活動の中でICTを効果的に活用する姿。正に、生徒が自ら学ぶ授業が展開されていました。

生徒が、変化し続ける予測困難な時代を生き抜いていくためには、自ら課題を見付け、解決する力が必要です。本部会研究主題の副題にある問題解決的な学習を充実させるには、課題を設定する場面が特に重要です。生徒が「学びたい、解決したい」と思える、必要感のある課題の設定が「わくわく」する主体的な学びを支える原動力になります。そして、この学びを支えるために、教師が生徒にどのような問いを投げかけ、どのように働きかけるかが重要な鍵となります。活動がただ楽しいだけでは家庭科で身に付けさせたい資質・能力を育成することは実現しません。生徒の興味・関心を育むとともに、深い学びを確かなものにするために、課題は、学習指導要領を踏まえた題材のねらいが達成できるようにします。例えば、「(既習の)〇〇を使えば、解決できそうだ」と、指導事項で身に付けた知識及び技能が活用できる場面を設け、「家庭科を学習すると、よりよい生活の実現につながりそうだ」と思える学習展開が必要です。

家庭分野で育成する資質・能力を明確にしながら、私たち教師も主体的に「わくわくする授業」を共につくっていきましょう。

(東部教育事務所)

東西で考え、語り合う家庭科部会に

部長 吉田みづき

今年度、東西に分かれていた研究大会が一つになり、県内全ての郡市から家庭科教員が一堂に集う研究大会となりました。本県中学校家庭科教育にとって、大きな転換点になったと感じます。たくさんの方が集まると、空気が変わります。視点が増え、言葉が動き、思考が揺さぶられます。今回の大会は、まさにそのことを実感する場でした。

「目的に応じたバッグ」を製作する研究授業では、各自が計画した製作が思うように進まなくなると「この部分はどう縫ったらうまくいった?」と友達に聞いたり、教師を頼ったり、教科書や動画、製作途中の見本を確かめたりしながら時間いっぱい活動を進めていました。そこには「計画通りにバッグを完成させたい」と、学習を支えるもの(資源)を自ら選び使い分ける主体的な姿がありました。

授業後の研修会では、授業の成果と課題について参観者の熱を帯びた対話が続きました。互いの考え方の違いに出会うことで、大会の研究主題に対する当事者意識がより高まったと感じています。特に、「小学校でも中学校でも行われる『生活を豊かにするための布を用いた製作』の違いをどう捉え、小学校で培われた力をどう引き継ぎ、中学校で何を意図的に育てるのかを考えることが大切だ」という杉山久仁子教授からの指摘は、私たちの新たな授業づくりのきっかけとなりました。

「分かりたい」「できるようになりたい」—こうした学びへの思いは自然に生まれるものではありません。学習活動の構成、問いかけ、教材や資料の提示。そこに、教師の意図と力量が問われます。今回の研究大会で生まれた「教科の本質からぶれない授業設計」の学びを明日からの実践へ。今後も東西の部員で共に考え、語り合い、家庭科の授業をさらに豊かなものにしていきましょう。

(富・和合中)

第69回 研究主題：「いきてはたらく力」につながる技術・家庭科の教育の推進 —生活や社会にいかすための問題解決的な学習の充実—

全地区会場

(富・南部中)

富山市立南部中学校において、中野沙耶教諭による研究授業「生活を豊かにする布を用いた製作～マイバッグづくり～」が行われた。

授業では、生徒が自ら課題を設定し、作品製作を通して思考を働かせ、主体的に課題解決に取り組む姿が見られた。生徒は、市販のキットを活用し、自分や家族の生活に役立つ「マイバッグ」の製作に取り組んだ。何を入れるのか、どのように使うのか（目的）、そのためにどのような機能をもたせるか（デザイン）、どのような縫い方の工夫をするのか（縫製）の3つの視点から自分の作りたいバッグを考え、「マイバッグプラン」を立てていた。自分の作りたいバッグを目指した「マイ



バッグプラン」を設定したことで、課題解決の必要性をもちながら製作する姿

につながっていた。

さらに、1人1台端末を活用した動画や資料の作成、学び合いコーナーの設置、多くの製作途中の見本の準備等、生徒のつまずきを解消する環境づくりにも工夫がみられた。生徒は友達との協働を通して他の視点を取り入れながら学びを深め、意欲的に製作に取り組んでいた。終末の振り返りでは、「マイバッグプラン」にある「目的」「デザイン」「縫製」の3つの視点で自分の製作状況を振り返った。自分の計画を見直し、次時の計画や目標を1人1台端末上のファイルに記録した。自己調整を図りながら活動する姿であった。ほとんどの学校で実施される「布を用いた製作実習」を取り上げた今回の授業提案は、部会員自身の授業

設計の見つめ直しにつながる示唆に富むものであった。

部会協議では、今年度から東西合同の研究大会



となったこともあり、多くの意見が出され、研修を深めることができた。

谷口久代指導主事（東部教育事務所）からは、「ねらいとする資質・能力を身に付けられるよう、ICTを活用し、個別に学習を進める場面と協働的に学ぶ場面、全体指導を効果的に組み合わせることが大切であり、そのことが授業改善につながる」と助言をいただいた。

後半、授業力向上アドバイザーの杉山久仁子教授からは、「技術・家庭分野における主体的・対話的で深い学び」について講義を受けた。学習指導要領に基づき、小・中・高の学習内容の違いやつながりを理解し、中学校段階の学習がその流れの中で位置付くように指導する必要があることが分かった。中学校では、小学校段階での学びを把握した上で、中学校で身に付けるべき資質・能力を明確にして授業を構想しなければならない。また、生徒が課題を設定する場面では、一人一人違う課題を設定できることを重要にするのではなく、生徒が当事者意識をもって課題を捉えることができているかが重要なのだということを教えていただいた。講演を拝聴し、学習指導要領をよく読み、理解を深めることの大切さを改めて実感した。今後の工夫と改善に生かしていきたい。

今井 彩圭（魚・西部中）
平 和章（射・小杉中）